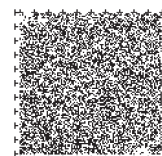


第 1 章

基本計画策定の 背景と経緯



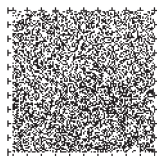
第1章

基本計画策定の背景と経緯

1 現・福岡県立美術館の概要

「福岡県立美術館」は、前身となる図書館と美術館の併置施設で昭和39(1964)年11月に開館した「福岡県文化会館」の時代を経て、昭和60(1985)年11月、全面改装し新たに美術館として福岡市中央区天神の須崎公園内に開館した。収蔵作品は約3,000件(約1万点)にのぼり、近世から現代までの幅広いジャンルの福岡県と関わりの深い作品を中心に収集している。とくに近代美術作品をコレクションの核とし、また、江戸時代に黒田藩御用絵師を務めた尾形家で守り継がれた「尾形家絵画資料」(福岡県指定文化財)や九州古陶磁(久我コレクション)、近現代工芸等のまとまったコレクションも有する。

これらの作品収集とそれに基づく研究とともに、福岡県立美術館では、福岡県の美術を多彩な視点で紹介する展覧会や国内外の優れた作品を紹介する展覧会を開催している。また、県民の創作活動の発表の場である「福岡県美術展覧会」(県展)や地域住民の参画を伴った移動美術館展等にも取り組んでおり、加えて、作家との共同主催で福岡のアートシーンを紹介する取組みや教育普及の視点に立脚したシリーズ展、夏休みのワークショップ等も行ってきた。



このマークは目の不自由な方などが使う音声コードです

2 新・福岡県立美術館 基本構想検討委員会報告

福岡県立美術館は、文化会館開館から50年以上経て、施設の老朽化が進み、また近年の新たな美術や美術館をめぐる状況の変化に対応できない面も出ていることから、平成20（2008）年8月に発表された「福岡県立美術館将来構想検討委員会報告」において、新しい県立美術館の必要性が提言された。

平成27（2015）年に「新・福岡県立美術館基本構想検討委員会」が開催され、平成29（2017）年3月同委員会の報告（以下「基本構想委員会報告」という。）において、「現・福岡県立美術館の現状と課題」、「新・福岡県立美術館の整備方針」について、以下のとおり提言がなされた。

（1）現・福岡県立美術館の現状と課題

ア 施設の老朽化

将来にわたる安全性確保への危惧や空調設備・照明設備等の機能低下による作品保存に適切な温湿度等の安定的な維持に対する懸念がある。

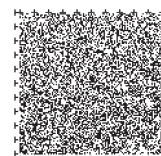
イ 施設の狭隘性

収蔵庫面積の狭隘さのための収蔵作品・収蔵資料の受入れの制約、専用の貸展示室がないための県民への展示室の提供の制約、展示室面積の狭隘さのための県展開催への制約や大規模企画展開催・大型作品展示の困難性が生じている。

ウ 施設の基本構造による機能の限界

躯体は美術館仕様ではなかった文化会館時代から変わっていないため、天井高の低さに起因する大型作品の展示の困難性、諸室配置の構造による展覧会場の複雑な動線、バックヤードスペースの狭隘さによる搬入出における作業時間の長時間化が生じ、また、アメニティ等にユニバーサルデザインが十分に取り入れられていない。

このマークは目の不自由な方などが使う音声コードです

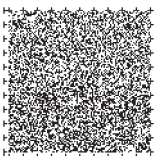


(2) 新・福岡県立美術館の整備方針

上述の現状や課題を踏まえ、以下のとおり、新・福岡県立美術館の望ましい施設整備の考え方が整理された。

ア 施設整備の基本方針

- 「展示」、「収蔵・保存」、「調査・研究」、「教育普及」等美術館としての基本的機能を確保する。
- 様々なタイプの展示や活動に対応可能な設備を備える。将来の展開を踏まえた情報インフラも整備する。
- 美術に関わる諸活動を行うことができる諸室・設備の整備、ユニバーサルデザインへ配慮した施設づくりに取り組む。
- 美術館総体への開放的な空間デザインの導入に取り組み、その際は管理・運営面も配慮する。
- 周囲の環境との調和を保つとともに新たな景観を生み出し地域を活性化する建築を目指す。
- ビジュアル・アイデンティティを構築し、施設・調度も含めて美術館をトータルにデザインしていく。
- 機能性や省エネルギー性に配慮する。特に、来館者や利用者の使いやすさに留意する。
- 施設としての持続性を十分に考慮し、また、将来の様々な変化に対応できるようにする。
- 耐震性、免震性や防犯性をはじめとした安全性について留意するとともに、大規模災害時において公共施設として人々の安全確保のために機能できるよう配慮する。
- IPM（総合的有害生物管理）等の保存科学領域の近年の動向を踏まえ計画を行う。

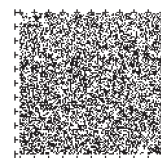


このマークは目の不自由な方などが使う音声コードです

イ 施設の規模ほか

- 施設規模は、近年建設された都道府県立美術館や政令指定都市、特別区を有する都道府県の都道府県立美術館等を参考とする。現・福岡県立美術館の課題を踏まえ、大型の作品も展示できる面積と天井高、「福岡県美術展覧会」（県展）や全国規模の公募展や特別展が十分に開催可能な面積の展示室等を整備する。
- 立地については、交通至便で人が集まりやすいこと、他の文化施設等との連携による相乗効果を生み出すこと、内外の人々に対する福岡の魅力の倍増が期待できること、これらを満たす場所への建設が望ましい。

このマークは目の不自由な方などが使う音声コードです



3 新・福岡県立美術館 建設地の選定

基本構想委員会報告を受けて、令和元（2019）年10月、有識者による「新・福岡県立美術館建設地選定委員会」（以下「選定委員会」という。）が設置され、新たな福岡県立美術館の建設地について検討が行われた。

選定委員会では、県内で活用可能な県有地及び取得可能性がある国有地等のうち、敷地面積10,000㎡以上確保できる土地について、基本構想委員会報告で示された

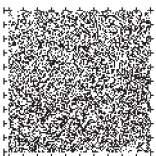
- ① 交通至便で人が集まりやすいこと
- ② 他の文化施設等との連携による相乗効果を生み出すこと
- ③ 内外の人々に対する福岡の魅力の倍増が期待できること

の3つの立地要件、期待できる効果や立地上の課題について詳細な比較検討が行われた。その結果、大濠公園南側（福岡武道館及び日本庭園の一部、福岡市中央区）が望ましい建設地として選定された。

また、現・福岡県立美術館については、平成26（2014）年に耐震改修等の工事が完了しており、今後も建物を利用することが可能であり、この建物を活用し、県民とともに歩んだ歴史を受け継ぎながら、新・福岡県立美術館と相互、補完的に運用していくことが望ましいとの報告がなされた。

県は、令和2（2020）年1月、選定委員会の報告を踏まえ、基本構想委員会報告で示された3つの立地要件に加え、新・福岡県立美術館に期待される「県民の芸術文化の拠点」、「まちづくり、地域活性化の拠点」、「観光の拠点」としての役割、解決すべき課題等について総合的に検討を行い、新・福岡県立美術館の建設地を「大濠公園南側にある福岡武道館及び日本庭園の一部を再整備した用地」に決定した。

また、選定委員会の報告を踏まえ、現・福岡県立美術館の具体的な活用方策を検討していくこととした。



このマークは目の不自由な方などが使う音声コードです